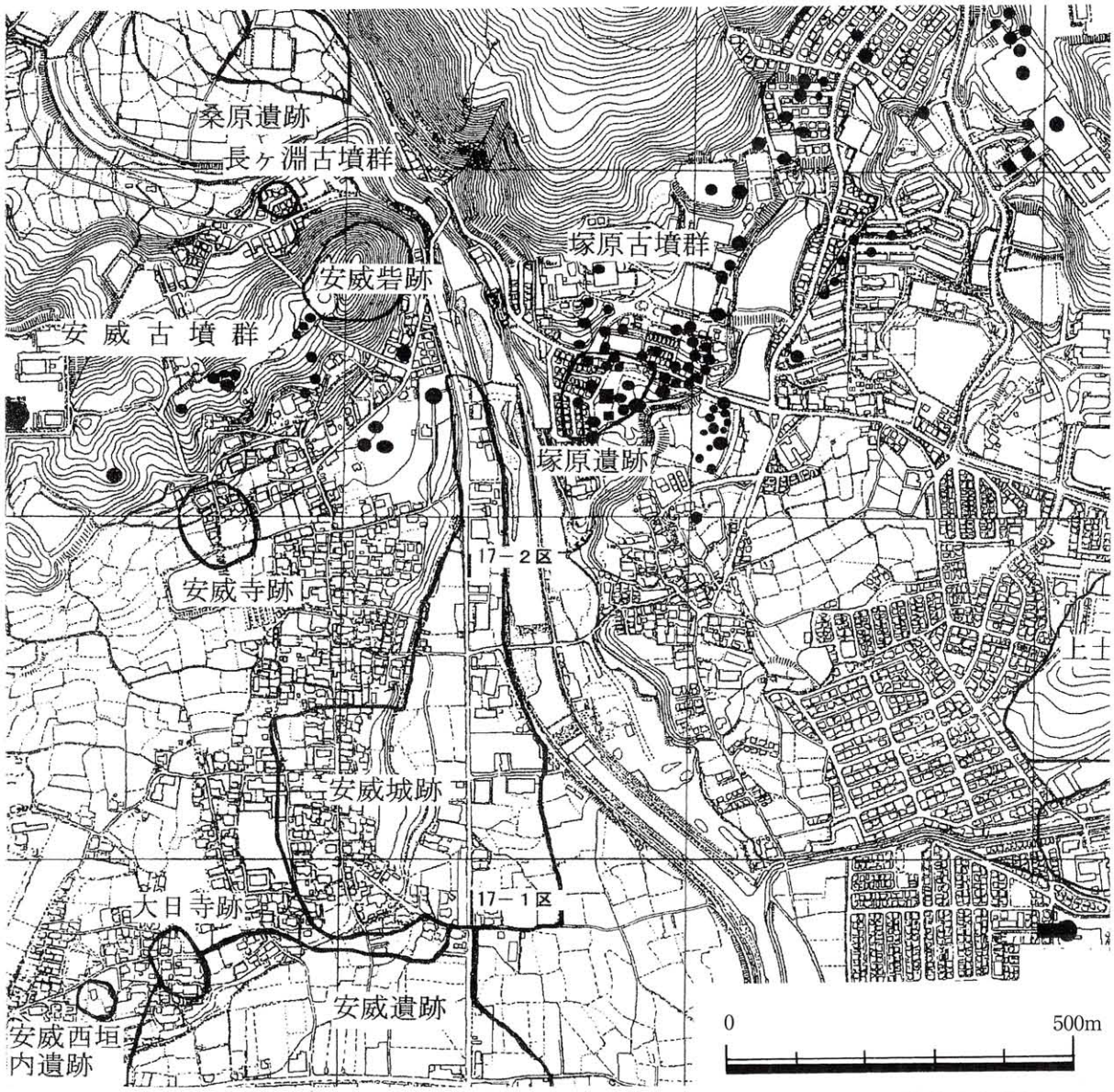
大阪府埋蔵文化財調査報告2007－1

安　威　城　跡

― 主要地方道茨木亀岡線道路整備工事に伴う調査 ―



調査区と周辺の遺跡

2007年8月

大阪府教育委員会

はじめに

安威城跡は、大阪の北摂地方東部を流れる安威川が、北摂山地への山間部入口付近の西岸段丘崖沿いに位置する遺跡で、周辺には多くの文化財が残っています。今回の調査において平安時代の建物群や、特筆される遺物として古墳時代前期の遺構から彷製鏡が出土しています。これらの遺構や出土遺物の歴史的資料は、今後の地域史の解明に役立つものと考えております。

調査にあたっては、茨木市教育委員会、大阪府安威川ダム建設事務所、地元自治会各位をはじめ多くの方々にご協力頂ました。深く感謝しますとともに、今後とも文化財保護行政にご理解、ご協力をお願い致します。

平成19年８月

大阪府教育委員会
文化財保護課長　丹上　務

例　　言

1．本書は、大阪府教育委員会が大阪府土木部の依頼を受け、主要地方道茨木亀岡線道路整備工事に先立って、平成17年度に実施した茨木市東安威所在、安威城跡の発掘調査報告である。

2．調査は、文化財保護課調査第一グループ技師奥　和之が担当し、それに伴う遺物整理は調査管理グループ技師藤田道子、主査三宅正浩が行った。本書の編集は、奥が担当し、執筆は奥及び富田卓見が行った。なお、調査番号は05044である。

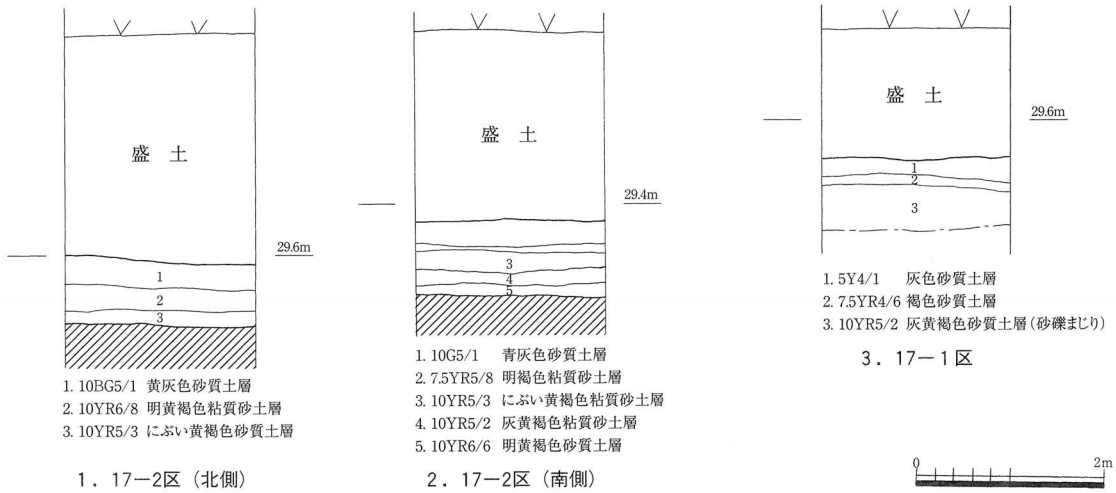
3．出土した鏡の保存処理、それに伴う写真撮影については、京都科学(株) に委託した。

4．調査の実施にあたっては、茨木市教育委員会、大阪府土木部、安威川ダム建設事務所をはじめとする諸機関、関係諸氏の協力を得た。

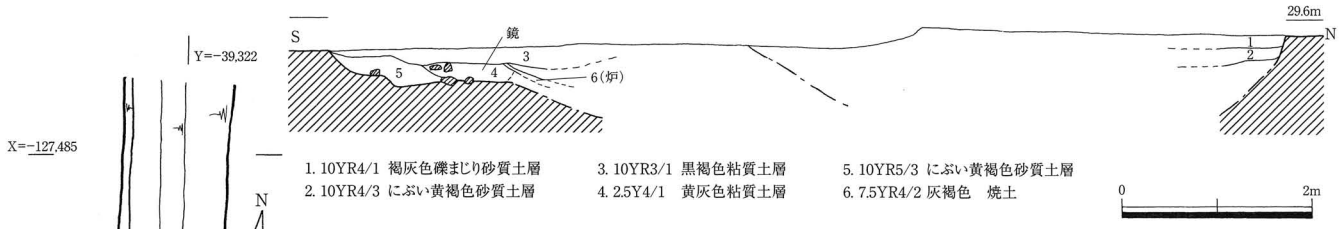
5．本書は、300部を作成し、一部あたりの単価は294円である。

1．経過

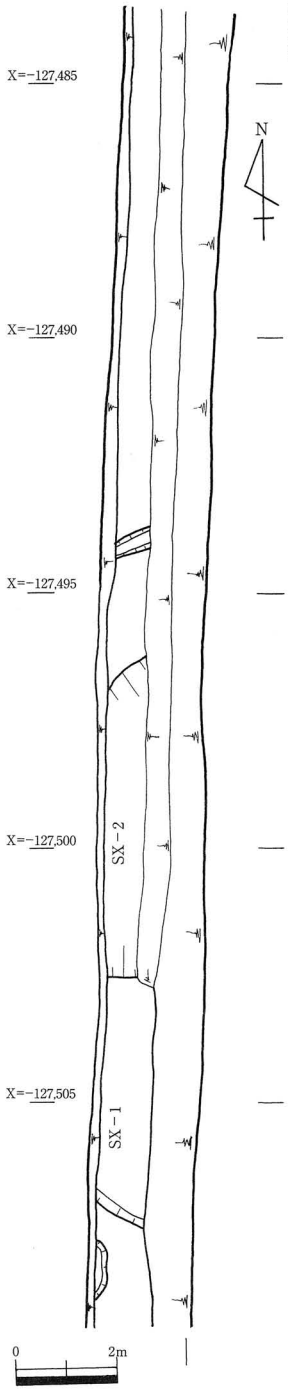
大阪府茨木市と京都府亀岡市を結ぶ主要地方道茨木亀岡線は、旧本線をおよそ倍の幅にするための改良・整備工事を実施している。そのうち新たに道路として拡幅する箇所については、全面



第１図　基本層序図



第３図　17－２区（北側）断面図



第２図　17－２区(北側)
遺構平面図

発掘を行い、また、すでに共用している箇所については、地下埋設物・構造物で遺構が破壊される部分の調査を行っている。今回の調査は、2004年度の調査に引き続き、ほぼ南北に走る道路東側の調査を実施した。なお、今回の調査は安威城跡の北端付近と南端付近の２ヵ所で行われ、南側を17－１区、北側を17－２区と呼称した。

２．周辺の環境

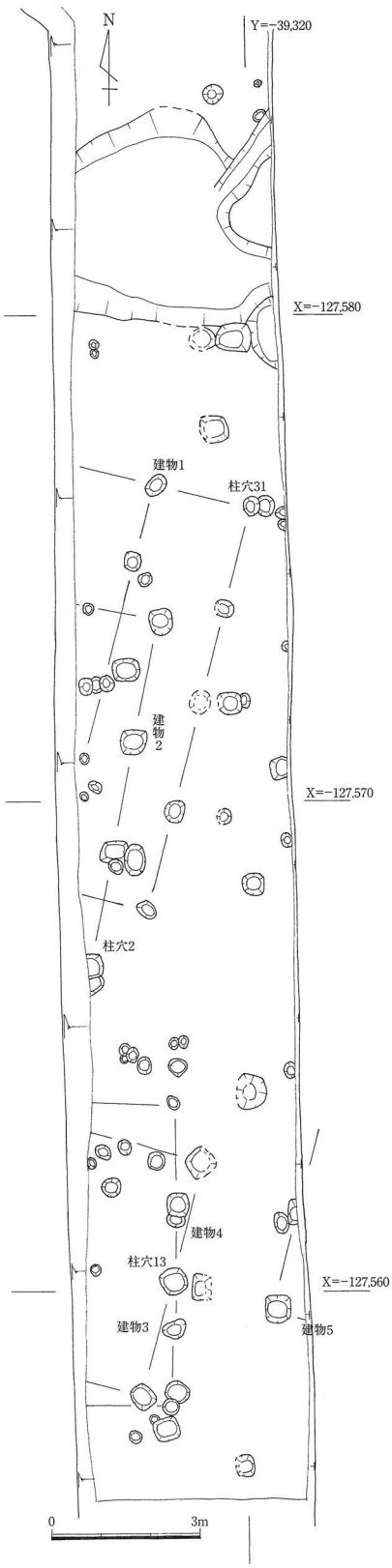
安威城跡は、大阪の北摂地方東部を流れる安威川西岸、北摂山地への山間部入口付近に位置している。

古墳時代では、西の丘陵上に前期の安威０号墳、１号墳。中期では安威川を挟み東の丘陵に太田茶臼山古墳。後期では北の山塊に安威古墳群や塚原古墳群などの群集墳。安威遺跡の南側には、耳原古墳。終末期では安威川を挟む北の山麓に阿武山古墳。また、安威川山間部入口付近に位置する桑原遺跡より、24基以上の群集墳が検出されている。

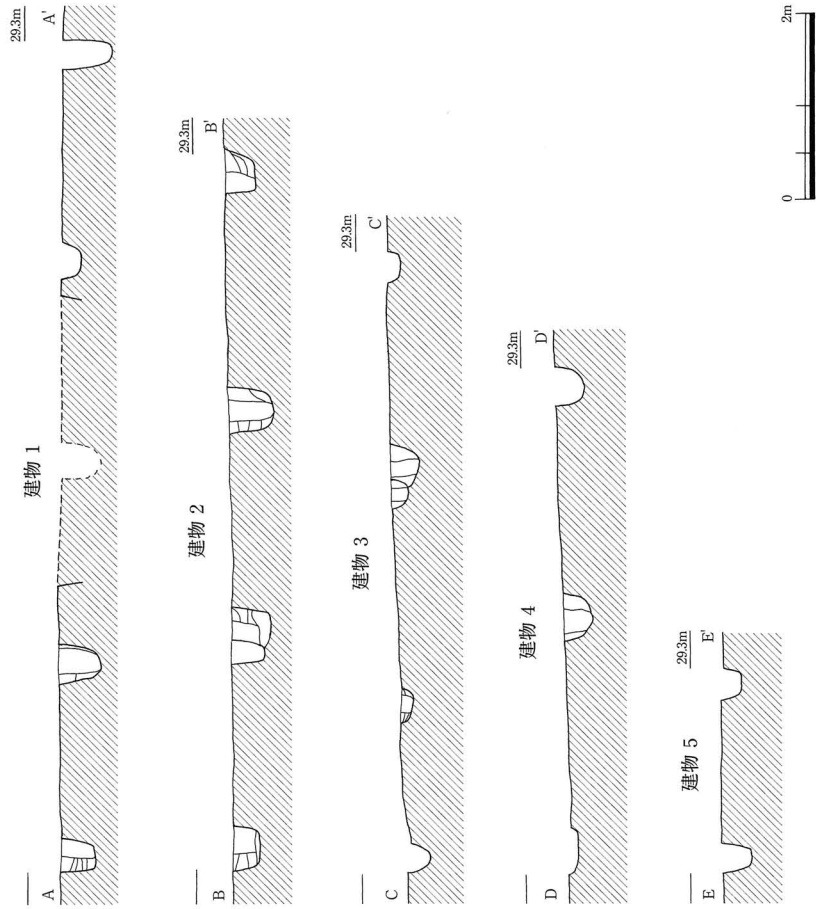
奈良・平安時代になると、調査地区の南方には、嶋下郡の郡衙推定地である郡遺跡。安威川を挟み東の丘陵上には太田遺跡や総持寺遺跡などの集落跡が出現する。これらは同一丘陵に存在する太田廃寺、平安時代創建とされる総持寺との関連が注目されている。

３．調査の成果

17－１区　調査区は南側に位置し、南端は安威遺跡と接する。掘削が遺構面の上層で終わっているため不明の点が多い。周辺の地形から判断すると、調査区は西側の山塊から西側に派生する丘陵の端部付近と推定される。調査は、全長約65m、幅約２mの範囲で行った。調査区の土層断面（第１－３図）および平面観察の結果、道路上面から約1.5m下、掘削最下層の一部に0.3mから0.5m前後の無数の川原石が折り重なる状況で検出した。川原石と川原石の間には隙間が存在することなどから、旧地形で斜面であった地点を造成し、平らにするため川原石を敷き詰めたものと推定される。その上層に厚さ0.1m前後の褐色砂質土層、最上層には0.2m前後の耕作土層が堆積する。出土遺物は、造成時の遺物と推定される近世瓦、中世と推定される瓦器椀片、土師器小皿片などが出土している。



第４図　17－２区（南側）
遺構平面図



第５図　建物土層断面図

17－２区　調査区は、山間部を流れていた安威川が平野部に移る地点周辺の西岸側に位置する。調査区は、北側が幅約２ｍ、長さ約69ｍ、南側が幅約４ｍ、長さ約32ｍ、全長約101ｍを測る。

調査区の層序は、調査区北側（第１－１図）では上層に道路造成時の盛土が約1.2ｍ存在し、その下に上面が29.6ｍ付近から、厚さ0.15ｍ前後の耕土層、厚さ0.1ｍ前後の明黄褐色粘質砂土層（床土）、遺物包含層である厚さ0.05ｍ前後の黄褐色砂質土層の順に堆積する。

南側（第１－２図）では、上層に道路造成時の盛土が約1.2ｍ存在し、その下に上面が29.3ｍ付近に厚さ0.15ｍ前後の耕土層、厚さ0.05ｍ前後の明褐色粘質砂土層、厚さ0.1ｍ前後のにぶい黄褐色粘質砂土層、厚さ0.05ｍ前後の灰黄褐色砂質土層、遺物包含層である厚さ0.05ｍ前後の黄褐色砂質土層の順に堆積する。

調査区北側の大半は、工事の掘削が遺構面上面で止まるため、遺構の状況が確認できたのは、北端から27ｍの区間のみである。検出した主な遺構は、落込み１と落込み２の土坑と推定される遺構で、両者は切りあって存在する。形状からともに土坑と推定されるが、土坑底まで掘削できなかったため詳細は不明である。落込み１は幅4.3ｍ以上、落込み２は幅約6.4ｍを測る。遺構の

周辺は、南北に走る水道管が調査区の東半分を占めているため、調査区の幅が１ｍ以下と狭く不明な点が多い。ただ、土層断面観察の結果、落込み１が落込み２より古く、土層断面の一部に炉跡が観察された。出土した遺物から時期は、落込み１が古墳時代前期、落込み２がそれ以降のものと推定される。また注目される遺物として遺構埋土中より彷製鏡（重圏文鏡）が出土しており、他にも土師器小型丸底壷、土師器甕などがある。

調査区南側の遺構（第４図）の大半は出土遺物から平安時代と推定され、一部古墳時代前期のものが存在する。平安時代の遺構は、柱穴で総数80個に近い。柱穴は、平面形では方形に近いものと円形に近いものとの２種があり、これらの中で建物と推定される５ヶ所の柱列を確認した。しかし、調査区の幅が約４ｍと狭いため、規模は不明で、柵列である可能性も捨てきれない。

建物１　梁間２間以上、桁行４間の総柱建物と推定される。梁間約3.7m以上、桁行約8.5m、柱間距離は2.0mから2.1mを測る。主軸方向はＮ－15°－Ｅを示す。建物北東角の柱穴31より、須恵器坏身（６）が出土している。

建物２　梁間２間以上、桁行３間以上の建物である。梁間約1.7m以上、桁行約7.3m、柱間距離は1.5mから2.5mを測る。主軸方向はＮ－11°－Ｅを示す。西壁際の柱穴２より、土師器甕（第６－５図）が出土している。

建物３　梁間１間以上、桁行３間の建物である。梁間約1.7m以上、桁行約6.2m、柱間距離は1.6mから2.6mを測る。主軸方向は座標北を示す。

建物４　梁間２間以上、桁行２間の建物である。梁間約2.3m以上、桁行約4.9m、柱間距離は1.5mから2.4mを測る。主軸方向はＮ－13°－Ｅを示す。北東から南西に並ぶ柱列で、柱穴である柱穴13より、緑釉陶器（第６－７図）が出土している。

建物５　桁行１間以上の建物である。柱穴の平面形が隅丸方形に近い形を呈しているため、建物と判断した。桁行約2.0m以上、柱間距離は約2.0mを測る。主軸方向はＮ－12°－Ｅを示す。

４．出土遺物（第６図）

１から３は、落込み１より出土。この遺構からは、注目される遺物として彷製鏡が出土している。１は土師器の小型丸底壷で、体部から下が欠損している。口縁部は、体部界の括部からやや斜め上方に立ち上がる。体部は比較的張り出す。口径約9.2cm、残存高5.8cmを測る。２は土師器甕で、口縁から下が欠損している。口縁部は斜め上方に伸び、端部は丸く、内面に緩やかな段を

番号	地区	梁間		桁行		柱間(m)	位置		総柱	柱穴 (m)					方位	備考
										柱形状	最小	最大	深さ			
		間	(m)	間	(m)	短～長	X	Y					深	浅		
1	2	2以上	3.7	4	8.5	2.0～2.1	-127,578	-39,322	○	円	0.17×0.18	0.44×0.48	0.40	0.07	N-15°-E	
2	2	2以上	1.7以上	3以上	7.3	1.5～2.5	-127,579	-39,323		円	0.18×0.20	0.55×0.60	0.55	0.08	N-11°-E	
3	2	1以上	1.7以上	3	6.2	1.6～2.6	-127,800	-39,323		円	0.19×0.23	0.45×0.47	0.47	0.12	N-0°	
4	2	2以上	2.3以上	2	4.9	1.5～2.4	-127,800	-39,323		円	0.30×0.32	0.50×0.53	0.32	0.13	N-13°-E	
5	2			1以上	2.0以上	2	-127,800	-39,318		方	0.50×0.50	0.50×0.54	0.33	0.23	N-12°-E	

17－２区建物計測値表

有する。体部内面にヘラ削りが認められる。口径約13.4cm、残存高約3.8cmを測る。３は、土師器高坏で坏部のみ残存している。坏部下に段を有し、そこから斜め上方に広がり、口縁端部付近でさらに外側に大きく広がる。口径約17.4cm、残存高約4.7cmを測る。

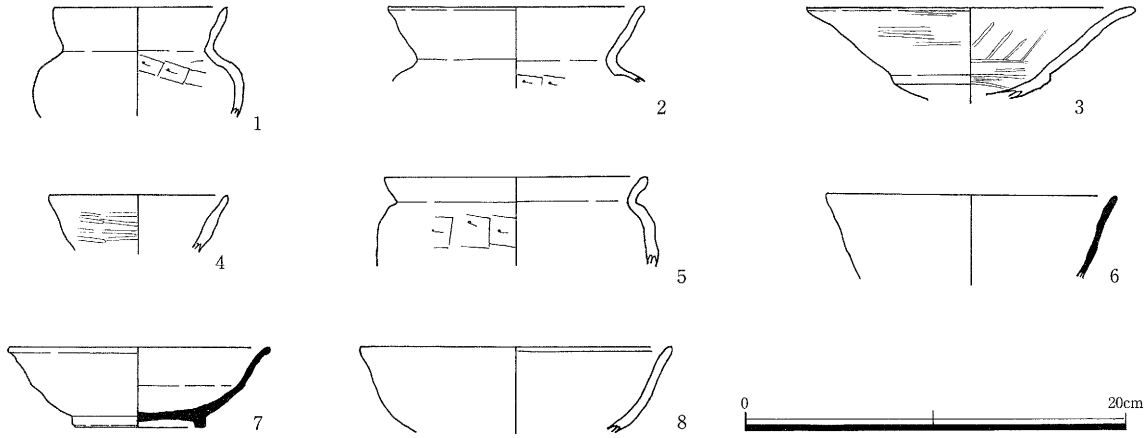
４は落込み35出土の小型丸底壷の口縁部で、体部が欠損している。口縁部は斜め上方に伸び、端部は丸い。口径9.6cm、残存高3.2cmを測る。５は土師器甕で建物２の柱穴２より出土。口縁は短く、斜め上方に伸び、端部は丸く仕上げる。体部は口縁部の界から緩やかな丸みを持ち、底部に下る。体部外面にはヘラ削りが認められる。口径13.9cm、残存高4.7cmを測る。６は須恵器坏身で、建物１の柱穴31より出土。底部は欠損し、底部から口縁部にかけてやや斜め上方に伸び、端部は丸く仕上げる。口径約15.2cm、残存高4.6cmを測る。７は緑釉陶器椀で、建物４の柱穴13より出土。底部から内彎気味に口縁部に伸び、端部付近で外側に摘み上げる。底部と口縁部の界には緩やかな沈線を一条巡らす。底部外面に断面四角形の高台を巡らす。口径約13.8cm、器高4.2cm、高台径7.1cmを測る。８は瓦器椀で、17－２区の明褐色砂質土層より出土。坏部は深く、底部は欠損している。底部から内彎気味に口縁部に伸び、端部内面に段を有する。口径16.4cm、残存高4.5cmを測る。

５．まとめ

今回の調査で遺構は、17－２区を中心に検出した。遺構の時期は、古墳時代前期と平安時代の２時期に大きく分かれる。

特に前回までの調査を含め、古墳時代前期にかけての遺構の範囲は、遺構の濃淡はあるものの、安威城跡・安威城跡の遺跡範囲全域に広がることを確認した。確認された遺構は、溝、土坑、落ち込みなどが大半を占めが、住居跡、建物などの遺構は、現在の所検出されていない。

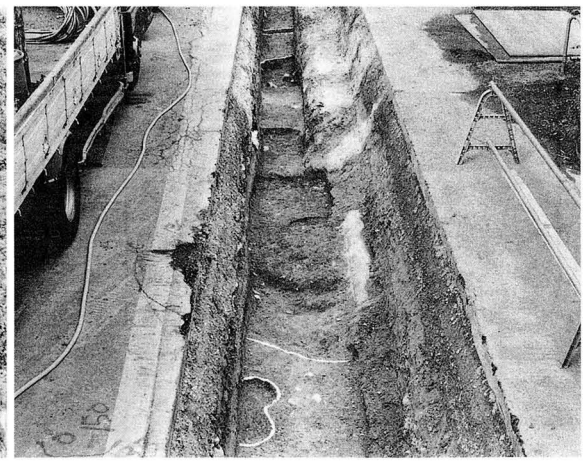
平安時代の遺構は、17－２区南側で検出した。出土遺物、柱穴の形状などから２時期に分けることができる。周辺の調査では、遺物は出土するものの、遺構の検出例は極めて少ない。遺構の範囲は、地形から判断して、東は安威川の段丘崖、西は丘陵との境までと推定され、南北は、調査結果から南北約50mの狭い範囲に集中している。集落跡と推定されるが、調査範囲が狭いため不明な点が多い。



第６図　　17－２区　出土遺物

1．17－2区（南側）全景（南から）

2．17－2区　柱穴13遺物出土状況



3．17－2区（北側）全景（南より）

4．17－2区　鏡出土状況

5．出　土　鏡

報　告　書　抄　録

ふりがな	あいじょうあと
書　　名	安威城跡
副 書 名	主要地方道茨木亀岡線道路整備工事に伴う調査
巻　　次	
シリーズ名	大阪府埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	２００７－１
編著者名	奥　和之
編集機関	大阪府教育委員会　文化財保護課
所 在 地	〒540-8571　大阪府大阪市中央区大手前２丁目　TEL06-6941-0351（代）
発行年月日	２００７年８月３１日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °　′　″	東経 °　′　″	調査期間	面積 (m²)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
あいじょうあと 安威城跡	いばらきしひがしあい 茨木市東安威	27221	45	34° 51′ 09″	135° 34′ 02″	2005. 11. 01～ 2006. 02. 28	450	主要地方道茨木亀岡線道路整備工事

所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
安威城跡	集落跡	古墳時代前期	土坑 焼土坑 溝 落ち込み	壷 小型丸底壷 甕 高杯 彷製鏡	
		平安時代	建物 柱穴	土師器 須恵器 緑釉陶器 瓦器	
		近　　代		瓦器 土師器小皿 近世瓦	

要　約	古墳時代前期	土坑・焼土坑・溝・落込みなどを検出した。特筆すべき遺物として焼土坑上面から彷製鏡が出土した。
	平安時代	建物５棟などを検出。柱穴の形状で２時期に分けることが出来る。

大阪府埋蔵文化財調査報告2007－１

安 威 城 跡

主要地方道茨木亀岡線道路整備工事に伴う調査

編集・発行　大阪府教育委員会
〒540-8571 大阪市中央区大手前２丁目　TEL. 06-6941-0351

発 行 日　2007年８月31日

印　　刷　株式会社 中島弘文堂印刷所
〒537-0002 大阪市東成区深江南2丁目6番8号　TEL. 06-6976-8761